青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告［2011.3］
Ｇ９－０２

中学校　英語

中学校英語科における読むことの指導を通して書くことの力を伸ばす指導法の研究
－音読と書く活動を関連付けた段階的な指導の工夫を通して－

五所川原市立五所川原第一中学校　　教諭　　花　田　　淳　子

要　　旨

本研究は，「書くこと」の力を伸ばすために，音読と書く活動を関連付けた段階的な指導の在り方を探ったものである。音読に関連させてワークシートを構成し書く活動を行った結果，「書くこと」についての生徒の苦手意識が減少した。また，書く活動において，音読で触れた英文を用いることにより，英問英答問題の正答数や条件英作文での語数が増加するなどの変化が見られた。

キーワード：中学校　英語　音読　ワークシート　自己表現

Ⅰ　主題設定の理由

これまでの自身の授業を振り返ってみると，英語を苦手としている生徒が最もつまずいているのは，英語を「読むこと」と「書くこと」であると感じる。平成21年に公表されたBenesse 教育研究開発センターによる「第１回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」によると，４技能の活動について，「英語を聞くこと」，「英語で話すこと」，「英語で書くこと」を「とても好き」，「まあ好き」と答えた生徒が４割台であった一方で，「英語で文章や本を読むこと」については３割台であった。また，「英語の文を書くのが難しい」と答えた生徒は７割台であり，「読むこと」と「書くこと」の指導の工夫と改善が，より一層重要であると思われた。

中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年９月）「第１章　総説　２　外国語科改訂の趣旨」には「４技能を総合的に育成する」という文言が繰り返し出てくる。このことから，改善の方向性として，複数の技能を併せた指導法を模索していく必要がある。

そこで，これまで自分の指導の中で分けて行ってきた読む活動と書く活動を，意識的に関連付けて行うことにした。「話すこと」は聞くことの模倣から始まり，人は次第に自分の体験や考えを表現していけるようになる。同様に英文を読む活動を通して触れた文章を，書く活動におけるモデル文として，自己表現に活用していくことができるのではないかと考えたためである。そのため，本研究では，アウトプットであると同時に効果的なインプットとしての側面も併せもつ音読を中心とした読む活動と，書く活動とを関連付けた段階的な指導の在り方を探ることとした。

Ⅱ　研究目標

読む活動，特に音読を通して，目的とする語彙や文構造の定着を図る。また，書く活動において，音読を通して理解した語彙や文構造を活用して表現できるようになるために，「読むこと」と「書くこと」を関連付けた段階的な指導が有効であることを実践的に明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

読む活動と書く活動を関連付けて，次のような手だてによる指導を行えば，「読むこと」と「書くこと」の力を伸ばすことができるであろう。

・目的とする語彙や文構造の定着を図るために，多様な方法で音読指導を行う。
・音読を通して触れた文章が，書くことによる自己表現に結び付くように，段階的な指導をする。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　研究における基本的な考え方

(1) 学習指導要領との関連について

平成20年３月告示の中学校学習指導要領第２章「第９節　外国語」の「１　目標」には，「英語を読むことに慣れ親しみ，初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする」「英語で書くことに慣れ親しみ，初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」とある。これらの目標と本研究を関連させるため，同学習指導要領「２内容（１）言語活動　ウ　読むこと」の「（イ）書かれた内容を考えながら黙読したり，その内容が表現されるように音読すること」，「エ　書くこと」の「（エ）身近な場面における出来事や体験したことなどについて，自分の考えや気持ちなどを書くこと」に焦点を置くこととした。さらに本研究では，「読むこと」における理解力と「書くこと」における表現力を育てるため，その橋渡しとして音読活動を中心に位置付けた。土屋は，「音読は，チャンクをなすそれぞれの語句の機能や内部構造についての知識を確実にし，反復練習することによって，それらが必要なときにいつでも自動的に口をついて出てくるような状態で脳の中に蓄積するのを助ける」（土屋澄男，2004）と示している。

よって，音読練習を行うことにより，まだ十分に身に付いていない語彙や文構造の理解を促し，定着させることができるのではないかと考えた。具体的には，基本文のインプットを目的とした多様な音読練習を行うこと，また，書く活動においては，基本文から自己表現へと結び付けるワークシートの工夫を試みた。これらの活動を通して，生徒の「読むこと」と「書くこと」に対する苦手意識を減少させることと，理解力と表現力の育成を図ることをねらいとした。

(2) 音読指導の工夫

ア　基本文導入のための音読練習

文法事項の説明の後，単語や文法，語と語のつながりへの理解を促すため，図１のハンドアウトを用いて音読練習を行った。教師の後について10例読んだ後，個人練習から全体練習，Read & Look upで読みを確認した。その後教師が５文を指定し，暗唱させた。

イ　基本文定着のための音読練習

前時に用いたハンドアウトを再度活用し，復習とウォームアップを兼ねて音読練習を行った。音読練習の手順については，ほぼ前時と同じであるが，基本文の一部を別の単語に置き換えて練習させ，表現力の向上を目指した。

ウ　教科書の音読練習

教科書本文の内容を理解させた後，黙読→Listen→教師の後についてSlash Reading →Listen and Repeat →Pair Reading→Buzz Reading→Read and Look up→Over Wrappingを基本的な流れとし，音読練習を行わせた。

音読練習Questions 「私は～だと思う」編

１．私は英語は大切だと思う。	１．I think that English is important.
２．私は彼が若く見えると思う。	２．I think that he looks young.
３．私は私たちはコンピュータが必要だと思う。	３．I think that we need computers.
４．私はタロウがハナコを好きだと知っている。	４．I know that Taro likes Hanako.
５．私は明日晴れるといいなと思います。	５．I hope that it will be sunny tomorrow.
６．テイラーは、この学校がとてもいいと思っている。	６．Taylor thinks that this school is very good.
７．あなたは英語が大切だと思いますか。	７．Do you think that English is important?
８．あなたはテイラーが五所川原に住んでいるのを知っていますか。	８．Do you know that Taylor lives in Goshogawara?
９．私は数学が簡単だとは思いません。	９．I don't think that math is easy.
１０．私は明日雨だとは思いません。	１０．I don't think that it will be rainy tomorrow.

＊慣れてきたら、that は省略してもかまいません。

- 3 -

図１　音読練習ハンドアウト

エ　重要語句の穴埋め問題

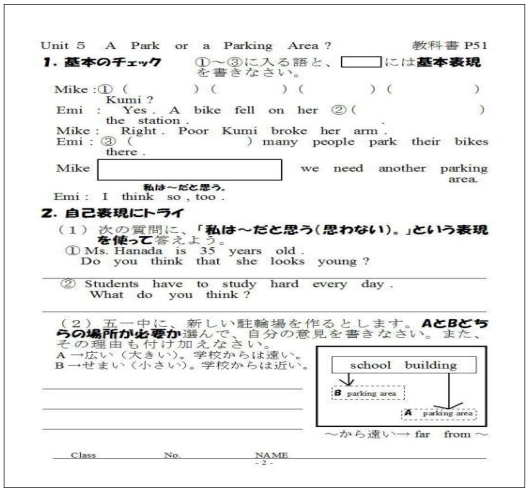
教科書の音読後に，音声・文字・内容理解の結び付きを強化することを目的に，重要語句の穴埋め問題を設定した。重要語句には基本表現の他，対話や英作文で役立つ表現や語句を選んだ。

オ　英問英答問題

これまでの本校での定期テスト等における英問英答問題については，特に疑問詞から始まる疑問文への応答について正答率が低かった。これは，英文そのものの意味

(3) 書く活動におけるワークシートの工夫

図２で示す通り，ワークシートを３段階に分けて構成した。



Unit 5　A Park or a Parking Area ?　　教科書 P51

1. 基本のチェック　①～③に入る語と、［　　］には**基本表現**を書きなさい。

Mike :① (　　) (　　) (　　) (　　) Kumi ?
Emi : Yes. A bike fell on her ②(　　) the station.
Mike : Right. Poor Kumi broke her arm.
Emi : ③ (　　) many people park their bikes there.
Mike ［　　］ we need another parking area.
私は～だと思う。
Emi : I think so, too.

2. 自己表現にトライ

（１）次の質問に、**「私は～だと思う（思わない）。」という表現を使って**答えよう。
① Ms. Hanada is 35 years old.
Do you think that she looks young ?
② Students have to study hard every day.
What do you think ?

（２）五一中に、新しい駐輪場を作るとします。**AとBどちらの場所が必要か**選んで、自分の意見を書きなさい。また、その理由も付け加えなさい。
A →ない（大きい）。学校からは遠い。
B →せまい（小さい）。学校からは近い。

school building
B parking area
A parking area
～から遠い～ far from ～

Class　No.　NAME
- 2 -

図２　書く活動のワークシート

が分からないことや，どのように答えたらよいか分からないということが原因として考えられる。そこで，基本表現を用いて答えることを指示することにより，英文の意味を考え，図１の音読練習で触れた基本文を活用できるような問題を設定した。

ウ　条件英作文問題

問題文には明示されていないが，その課で学習した文法事項を用いることが求められている問題である。このような問題については，これまでは無答が多く，書いた英文も１文のみで答える生徒が多かった。そのため，まずは基本表現を用いて答えることができるという見通しをもたせた。更に理由や説明を付け加えさせることによって，自己表現力を高めることを目指した。

２　検証の実際

(1) 生徒について

五所川原市立五所川原第一中学校第２学年２クラスを対象として検証授業及び調査を行った。各種テストの結果から，「伝える内容を整理して書くこと」についての問題で，両クラスとも正答率が４割以下と低く，「書くこと」に対してかなりの生徒が苦手意識をもっていると予想された。

(2) 指導計画

Unit５ A Park or a Parking Area ?（東京書籍 NEW HORIZON English Course２）を検証授業の単元として扱った。この単元は４つのセクションに分かれ，新出文法としては，接続詞if,that,when,becauseを含む文が取り上げられている。図３に示すように，新出文法の理解から書く活動に至るまで，音読練習を授業の中心に置いて授業内容を構成した。鈴木は，「音読によって，スペリングと発音の結びつきを強化するとともに，学習した語彙や文法などを内在化でき，また，ワーキングメモリーを鍛えること」ができるとしている（鈴木寿一，2009）。また，安木(2009)は，音読指導において文全体を記憶する活動の必要性を説いており，音読の指導順序決定のための原則として，以下の観点を指摘している。

・最初のレベルでは記憶が不要なものから開始し，徐々に記憶が必要な音読へと移行する。
・音声モデルを与え何度も音読練習した後に音読練習を実施する。
・練習単位は句から節，そして文へと単位を広げていく。

この考え方に基づき，１つのセクションを２時間扱いとして指導計画を立てた。第１時は新出文法の導入，基本文の音読練習，教科書本文の内容理解とし，第２時は基本文を応用させる音読練習，教科書本文の音読練習，書く活動という指導の流れとした。また，教科書の音読練習では，新出文法の他に，特にそのセクションのポイントとなる重要表現や語句を含む文を絞り込み，強調して音読練習を行った。

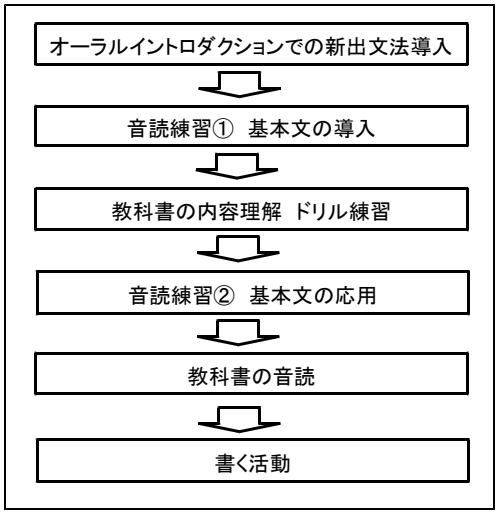


図３　音読から書く活動までの指導手順

(3) 検証授業について

本時はUnit５　Dialogのセクションの第２時として，基本文の音読練習，教科書本文の音読練習，書く活動を主な言語活動とした。ウォームアップでは，前時の基本文である I (don't) think that ～.を生徒から引き出すようにした。次に，基本文の音読練習ハンドアウトの中から，肯定文，否定文，疑問文を合計５文指定し，全員で発音練習した後，個人の暗唱練習，Read and Look up，ペアでの暗唱確認を行った。そして，教科書の内容理解として概要を確認した後，教科書の音読練習を行った。最後に書く活動では，基本文や重要語句の穴埋め，英問英答の後，「学校に新しい駐輪場を作る場合ＡとＢどちらの駐輪場が必要か，図を参考にして自分の意見とその理由を書く」という条件英作文を書くことを目標として設定した。また，理由を付け加えられるのであれば，文を足してもよいと指示をした。

ア　生徒の「書くこと」に対する意識の変容

事前と事後に行った14項目から成る生徒の意識調査を t検定により比較した。その結果，「文法を覚えること」（$t=1.99$，$p<.05$），「自分が伝えたいことを英語で書くこと」（$t=1.97$，$p<.05$），「基本文を応用して英文を書くこと」（$t=1.99$，$p<.05$）の三つの項目において有意差が見られた。図４，図５，図６に示すように，検証授業の事後では生徒の「書くこと」についての苦手意識が減少した。

「文法を覚えること」については，基本文となる英文を音読練習で繰り返すことで英文の語順に気を

付けるようになり，文構造の理解につながったためではないかと考えられる。また，「自分が伝えたいことを英語で書くこと」については，音読練習での基本表現から否定文や疑問文，英文の一部を別の語に置き換えて自己表現する活動を行ったことにより，様々な表現に触れ，書く活動に自分なりに活用できる生徒が増えたものと思われる。さらに，「基本文を応用して英文を書くこと」が「できる」「だいたいできる」と答える生徒が増加した。これまで英語でどのように表現すればよいか悩んでいた生徒が，音読練習で触れた基本文を使って答えることができそうだと見通しをもって課題に取り組んだのではないかと考えられる。また，基本文，英問英答，条件英作文という段階に慣れることで「書くこと」に対する自信もつき始めてきたものと思われる。

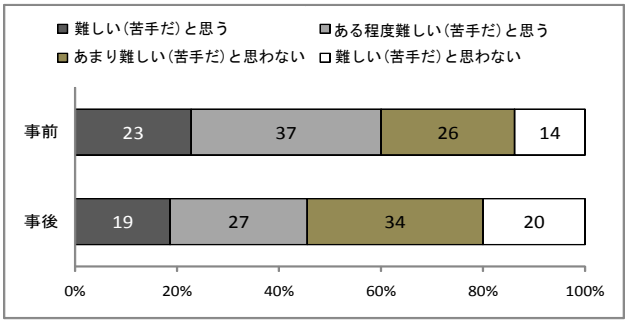


図４　「文法を覚えること」についての意識の変容

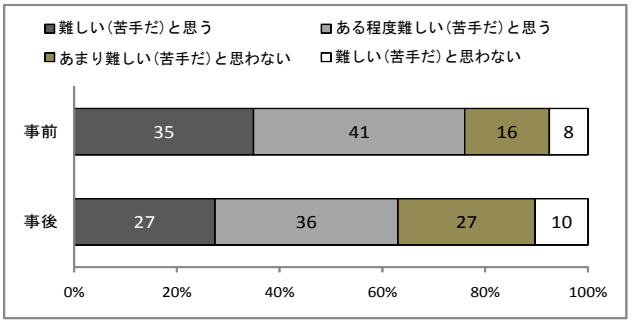


図５　「自分が伝えたいことを英語で書くこと」についての意識の変容

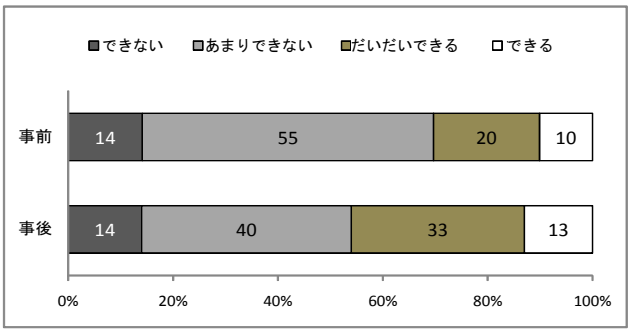


図６　「基本文を応用して英文を書くこと」についての意識の変容

イ　ワークシートの分析

図７はUnit５のセクションごとのワークシートの基本文問題の正答率である。セクション別に正答率を見ると，セクション２が高く，セクション３は低い結果となった。これについてはセクション２の音読の英文(I think that we need computers.)が，教科書本文の基本文にほぼ近い形であったため，生徒の印象に残りやすかったと考えられる。またセクション３では，接続詞後の主語の欠落や動詞を過去形にしていないといった誤りが目立った。これは接続詞の後の人以外の主語のパターンに慣れていなかったことと，生徒の文法理解が深まっていないことが考えられる。

英問英答問題の平均点は，セクション１では2.71，セクション２では3.22，セクション３では2.87，セクション４では3.14となり，分散分析の結果，統計的有意差が見られた。
(F=10.02,p<.001)

さらにライアン法で下位検定を行った結果，表１の四つの組合せで有意差が見られた。また図８に示すように，対話文をベースにしたセクション１とセクション２の正答数を比較するとセクション２で伸びが見られた。セクション１では主節と接続詞節の理解がまだ不十分であったのに対し，セクション２では語順の理解が深まり，文法的誤りが減少したことが要因として挙げられる。同様に，図９に示すように，説明文をベースとしたセクション３とセクション４の間にも，正答数の伸びが見られた。セクション３では，対話文に比べ本文の語数が増えたことにより，内容理解に時間がかかったが，セクション４では説明文の語数に慣れ，基本文と教科書本文の内容理解が比較的容易になってきた

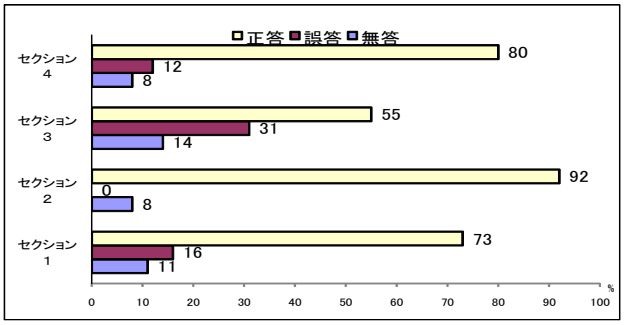


図７　セクションごとの基本文問題の正答率

表１　英問英答の平均点の下位検定の結果

有意差のあるセクションの組み合わせ	t値	p
セクション２－セクション１	4.71	p<.001
セクション２－セクション３	3.52	p<.001
セクション４－セクション１	3.98	p<.001
セクション４－セクション３	2.80	p<.01

のではないかと思われる。さらに，音読練習における自己表現活動に慣れ，音読練習の英文を基にしたと思われる解答が増えたことも要因として考えられる。

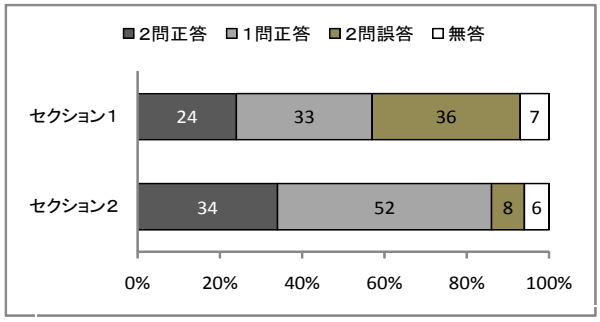


図８　セクション１，２（対話文素材間）における正答数の変化

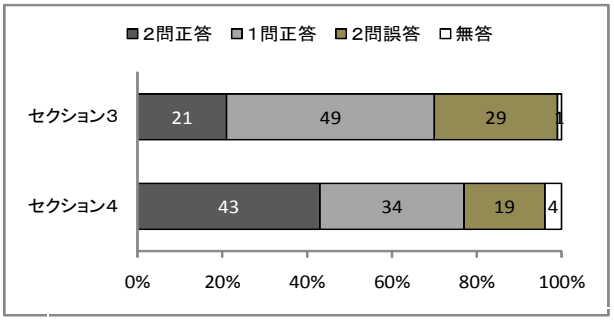


図９　セクション３，４（説明文素材間）における正答数の変化

条件英作文における基本文の正答率は，表２に示すように，各セクションとも６割から８割弱と安定していた。また，分散分析の結果，語数については各セクション間で有意な差が見られた(F＝32.4, p<.001)。 セクションごとの平均語数についても表２の通りであり，ライアン法で下位検定を行った結果，表３の四つの組合せで有意差が見られた。セクション３，セクション４と，徐々に語数を伸ばし，最終のセクション４が，それまでのすべてのセクションより語数が増加しているという結果を示している。生徒は，条件英作文の問題文から，基本文又はその応用文を用いて解答するようになったものと思われる。また，説明や理由を付け加えるという指示により，基本文と既習の文法事項につながりをもたせ，自分なりの表現を考えて英文を書くようになったものと考えられる。さらに，条件英作文において語数の伸びを示した生徒の英作文を抽出して分析を行った。

表２　条件英作文の正答率と平均語数

セクション	基本文の正答率(%)	平均語数	生徒数
1	70	6.48	65
2	70	6.93	65
3	65	7.77	65
4	78	10.48	65

表３　条件英作文の平均語数の下位検定

有意差のあるセクションの組合せ	t値	p
セクション４－セクション１	9.00	p<.001
セクション４－セクション２	7.96	p<.001
セクション３－セクション１	2.90	p<.01
セクション４－セクション３	6.09	p<.001

生徒Ａの作文（原文のまま）

セクション１	If it's sunny, let's go to the store. Let's go shopping there.
セクション２	I think that we need A parking area. It's big.
セクション３	When I went to my friend's house, I study English and play games.
セクション４	I like summer because I can enjoy fire festival. I'm going to watch a fire festival next year .

生徒Ｂの作文（原文のまま）

セクション１	If it's rainy, let's go to friend's house.
セクション２	I think we need B. It's near the school building.
セクション３	When I went to game shop, I played games . I was exciting .
セクション４	I like summer because I can enjoy fireworks, and I can enjoy fishing .

生徒Ｃの作文（原文のまま）

セクション１	If it's sunny, with me to the sea.
セクション２	I think that need B parking area small.
セクション３	When I went to shop, I eated ice.
セクション４	I like summer because I can enjoy swimming. I like sea and pool.

生徒Ａは，英語学習に意欲的に取り組む生徒であり，文法事項の定着も比較的良い。どのセクションも基本文を活用して解答しており，理由や説明の文も付け加えることができている。

生徒Ｂは，文法事項の定着は不十分なものの，音読練習に常に意欲的に参加した生徒である。セクション１では基本文のみであったのに対し，セクション２からは自分なりの説明文を付け加えている。

生徒Ｃは，英語学習を苦手としている生徒である。セクション１，２では，主語と動詞の欠落，語順の誤り等が見られる。しかし，セクション３，４においては，動詞や冠詞の誤りはあるが，基本文を使って解答していることが分かる。抽出生徒の例のように，音読練習で触れた基本文を，条件英作文に応用できるようになった生徒には本研究の音読練習の効果がある程度反映されたと言える。しかし，基本文を活用しようとしているものの，動詞や代名詞などの既習事項の誤りが多い生徒もいた。つまり，これらの生徒が基本文を確実に定着させ，応用するに至るまでには，語句から節，文につながる，よりきめ細かな音読練習と，書く活動における既習事項の復習とフィードバックが重要だと考えられる。

Ⅴ　研究のまとめ

音読と書く活動を意識的に関連付けて授業に位置付けた結果，「書くこと」についての生徒の苦手意識が減少した。生徒は音読練習で基本文の構造をとらえ，基本文から自己表現へと段階に応じたワークシートで確認し応用することにより，既習事項を用いて英文を書くことに慣れてきたためであると思われる。また，英問英答問題の正答数や，条件英作文での語数が増加した。既習の表現が特定されるような課題を設定したことで，音読練習で触れた基本文を使えるか見通しをもって課題に取り組み，自分の考えや気持ちに添う内容を付け加えようとする生徒の意欲が高まったものと考えられる。

Ⅵ　本研究における課題

事後調査では，約９割の生徒が「授業で音読練習に一生懸命取り組んだ」と回答しており，約８割の生徒が「家庭学習で音読練習を行っている」と回答している。生徒は，音読が英語学力の向上に役立つ有効な活動であると認識していることがうかがえる。しかし，音読で触れた英文を，生徒が書く活動に生かしていくためには，よりきめ細かな音読練習と書く活動における既習事項の復習の在り方について考えていく必要がある。今後は，言語の使用場面を生徒がより自分のことと密接に考えさせながら自己表現に生かしていく音読練習の在り方を考え，音読活動自体を楽しく興味深いものにする工夫をしていきたい。

また，本研究では，「読むこと」の力がどれだけ生徒の身に付いたかについては十分に検証することができなかった。音読テストの実施や内容理解を深める「読むこと」の指導の在り方についても考えていかなければならない。そして，音読を「聞くこと」や「話すこと」の言語活動にも関連させながら，音読による英語の学力の向上を生徒に体感させていく方法を，引き続き研究していきたい。

＜引用文献＞

文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　外国語編（平成20年９月）』，p3

文部科学省　2008　『中学校学習指導要領（平成20年３月）』，pp 105,106

土屋澄男　2004　『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』，p5，研究社

鈴木寿一　2009　「「音読」こそがすべての基本」『英語教育　2009年11月号』，p10，　大修館書店

＜参考文献＞

安木真一　2009　『バランスのよい英語力育成のための音読指導法とその順序』『英語教育　2009年11月号』，大修館書店

＜参考ＵＲＬ＞

Benesse 教育研究開発センター　2009　「第１回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/index.html (2011.1.26)

桐木建始　2004　ANOVA4 on the web
http://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4　(2010.12.28)